

エリザベス朝演劇における社会的弱者としての病人 ——感染症罹患者の階層化と *Timon of Athens* への一つの視座——

佐野 隆 弥

0. はじめに

本論では、エリザベス朝演劇に見られる各種の社会的弱者表象探求の一環として、特に疾患の罹患者つまり病人や患者について議論を行い、そのことを通して得られた知見を元に、William Shakespeareの*Timon of Athens* (c.1606-8) 解読のための新たな視座の記述を行う。最初に、議論の流れを以下に提示しておく。

1. 初期近代イングランドにおけるペスト罹患者の弱者化
2. 医療行為と難病に内在する階層化のヴェクトル
 - a. 治癒神と難病治療
 - b. 難治性疾患と皮膚病変
3. 社会的弱者としての病人
 - a. 初期近代演劇からの検証
 - b. *Timon of Athens* への一つの視座

そこで先ず最初に、この後の議論で扱う資料の対象領域を明確にし、その上で「社会的弱者」の定義について考えておきたい。本論ではエリザベス朝演劇における社会的弱者表象の分析を課題とするが、後続の議論では、主題の性質上、劇場閉鎖(1642年)までの広義のエリザベス朝期を中心としながらも、その前後の時期——場合によっては、大きく外れる時代——にも言及すること、またジャンル面でも、Shakespeareや他の劇作家の演劇作品と並んで、それ以外のドキュメントや外国作品にも触れることを断っておく。

また、社会的弱者に関して、今回は、各種疾患の罹患者つまり病人や患者について特化した議論を行うが、その理由は、何よりも病人という存在が、社会的にネガティブな評価を受ける範疇の代表的なものの一つであること、より正

確に表現するならば、罹患する・病気になることによって、多くの場合社会的弱者であることがより明確に可視化されるからであり、この点については後の議論でもう一度言及する。さらに、「各種疾患の罹患者」という点に関しても、本論では、精神医学的あるいは心療内科の疾患を主に扱う、該当時期の主要な医学的言説であったガレノスの体液病理説に関しては割愛し、よりフィジカルな疾患である疫病すなわち感染症を中心に議論を展開する。社会的弱者という主題からは、後者の方が視覚的により顕示的であると判断するからである。

1. 初期近代イングランドにおけるペスト罹患者の弱者化

では、初期近代イングランドにおける感染症とは何か、という問題を考察する時、やはり何をおいてもペストを外す訳にはゆかない。幸い、我々の手元には、Thomas Dekker によるセンセーショナルなパンフレット——*The Wonderful Year 1603* (1603)——が残されているので、社会的弱者表象を考える足場として、この資料からスタートしてみたい。

The Wonderful Year 1603 は、Dekker による最初のパンフレット作品と考えられていて、同年に崩御した Elizabeth I に対する追悼と、彼女を襲って即位した James I に対する言祝ぎが、前半部に記述されている。しかし、このパンフレットの中核は、猛威をふるったペストに対する恐怖とロンドンの悲惨な状況に関する、独特の迫真性をもった描写であり、ここでは、ペストの猛威とその圧倒的な破壊力が、暴君と彼が率いる軍勢に喩えられている箇所を引用してみたい。(以下、本論における引用箇所の下線はすべて著者による。)

at length he[=the Plague] and his tiranous band entred: his purple colours were presently (with the sound of Bow-bell in stead of a trompet) aduanced, and ioynd to the Standard of the Citie; he marcht euen thorow Cheapside, and the capitall streets of *Troynouant*: the only blot of dishonor that struck vpon this Inuader, being this, that hee plaide the tyrant, not the conqueror, making hauocke of all, when he had all lying at the foote of his mercy. Men, women & children dropt downe before him: houses were rifled, streetes ransackt, beautiful maidens throwne on their beds, and rauisht by sicknes: rich mens Cofers broken open, and shared amongst prodigall heires and vnthriftie

seruants: poore men vsde poorely, but not pitifully; he did very much hurt, yet some say he did very much good. Howsoever he behaued himselfe, this intelligence runs current, that euery house lookte like *S. Bartholmewes Hospitall*, / and euery streete like *Bucklersbury*, for poore *Methridatum* and *Dragon-water* (being both of them in all the world, scarce worth three-pence) were bort in euery corner, and yet were both drunke euery houre at other mens cost. *Lazarus laie groning at euery mans doore, mary no Diues was within to send him a crum, (for all your Gold-finches were fled to the woods)* nor a dogge left to licke vp his sores, for they (like *Curres*) were knockt downe like *Oxen*, and fell thicker then *Acornes*.¹

彼と配下の荒々しい部隊は町に突入した。ラッパの音ではなく、ボウ教会の鐘の音とともに、彼の真紅の軍旗はすぐに進められ、町の旗と合流した。彼はチープサイド、トロイノヴァントの大通りを行進した。この侵入者に付けられた汚点ともなるべき、ただ一つの不名誉は、全ての者が慈悲を乞うて彼の足下にひれ伏したのに、征服者としての慈悲を示さず、暴君としての振る舞いを取り、全てのものを荒し放題、荒らしまくったことだった。男・女・子供は彼の前でうち倒され、家はかき乱され、街路は蹂躪された。美しい娘は寝台に投げ出され、病気に犯された。金持ちの金庫はうち砕かれ、無法者の跡取りや金使いの荒い召使いたちによって、中身は奪われた。貧乏人は無惨な扱いを受け、情け容赦はなかった。疫病は大損害を与えたのだったが、彼がとてつもない働きをしてくれた、と言っている人もいる。

彼の振る舞いがどうであったにせよ、全ての家は聖バーソロミュー寺院の病院のよう、全ての通りはバクラズベリーのようだ、という噂が流れていた。それというのも、お粗末な疫病解毒薬（これは3ペンスもしない安物）が街角という街角で箱に収めて置かれてあり、町の費用でひっきりなしにそれが飲まれていたからだった。どこの家の戸口にも、乞食がうめきながら横たわり、彼にパンくずを与える金持ちは、家に全くいなかった。裕福な者は森に飛んでいってしまったからである。(以下省略)²

ペストが細菌による接触感染症であることが、北里柴三郎によって報告されたのが、1894年。エリザベス朝の人々にとって、自分たちを襲う疫病の原因な

どまだ知る由もなかった訳だが、何らかの環境の元で空気感染する「流行病（はやりやまい）」であるとは考えられていて——これをミアズマ説と呼ぶ——、ペスト感染を避ける唯一の手段として、ペスト罹患者との接触を避け、不衛生な環境を回避するよう、Thomas Lodgeの*A Treatise of the Plague* (1603)を始め、当時のペスト関連の文献は例外なく指摘していた。

こうした感染防止策は、今日の公衆衛生の観点から見ても、極めて妥当なものであったと評価できるが、すべてのロンドン市民が郊外へと避難できた訳ではなく、そこには、避難行動の可否を左右する経済的要因が大きく関与していた——換言すれば、先の引用で確認したように、避難行動による罹患のリスク回避の可能性は、富裕層程高かったと言えるであろう。仮にペスト罹患者が社会的弱者であるとするならば、経済的格差による元々の社会的弱者が、感染によってより「弱者化」されるという構図が、ここには存在する訳である。

こうした構図は、60年後のロンドンにおいても、少しも変わらなかった。Daniel Defoeが*Robinson Crusoe*を出版した1719年の翌年、マルセイユでペスト流行との知らせがロンドンに到達する。その衝撃に触発されたDefoeが、1665年のロンドンにおけるペスト猖獗に取材し、1722年に出版したのが、*A Journal of The Plague Year*であった。ペストに関する本ルポルタージュは、17世紀半ばのこの大災厄を生き延びた、ナレーターH・Fによって語られているが、通説では、この人物はDefoeの叔父で馬具商人のHenry Foeであると言われており、さらに、作中で記述される各種の疫病対策は、James王時代に実際に用いられたもので、それがイングランドを襲ったこの最後の大流行でも使用され、有効であったことが指摘されている。

このように、Defoeの*A Journal of The Plague Year*は、1665年におけるペスト感染の実態をかなり正確に反映していると考えられる訳だが、その報告記の中にもやはり、Dekkerと同様の、貧困階層と疫病感染との関係に関する指摘が存在する。以下に、二箇所引用しておこう。

It is true, a vast many People fled, as I have observe'd, yet they were chiefly from the West End of the Town; and from that we call the Heart of the City, that is to say, among the wealthiest of the People; and such People as were unincumbred with Trades and Business: But of the rest, the Generality stay'd, and seem'd to abide the worst: So that in the Place we call the Liberties, and in the Suburbs, in *Southwark*, and in

the *East Part*, such as *Wapping*, *Ratclif*, *Stepney*, *Rotherhith*, and the like, the People generally stay'd, except here and there a few wealthy Families, as above, did not depend upon their Business.³

前に述べたように、確かにおびただしい数の市民が脱出した。しかし、避難したのはロンドン西部の住人や市の中心部の住人、つまり取引や商売に縛られていない、最も裕福な人々であった。

それ以外の庶民はロンドンに残った。どうやら、最悪の事態を耐え抜くつもりでいるらしかった。特別行政区と呼ばれている地域、郊外、テムズ川南岸のサザック、それにロンドン東部の区域では、商売に頼らなくてすむごく一部の豊かな家族は別にして、大部分の人は踏みとどまった。⁴

But it was impossible to beat any thing into the Heads of the Poor, they went on with the usual Impetuosity of their Tempers full of Outcries and Lamentations when taken, but madly careless of themselves, Fool-hardy and obstinate, while they were well: Where they could get Employment they push'd into any kind of Business, the most dangerous and the most liable to Infection; Suppose it was burying the dead, or attending the Sick, or watching infected Houses, which were all terrible Hazards, but their Tale was generally the same. It is true Necessity was a very justifiable warrantable Plea, and nothing could be better; but their way of Talk was much the same, where the Necessities were not the same: This adventurous Conduct of the Poor was that which brought the Plague among them in a most furious manner, and this join'd to the Distress of their Circumstances, when taken, was the reason why they died so by Heaps;⁵

だが、貧しい人々の頭に、何かを叩き込もうとしても徒労であった。病気にかけると、大声で叫んだり嘆いたり、いつもの衝動的な行動に走るが、元気な間は恐ろしく不注意で無謀で頑固だった。働き口さえあれば、どんなに危険で、病気に感染する危険が大きい仕事でも無頓着なのだ。

(中略)

たとえば、死者の埋葬や病人の看護、または感染した家の監視など、どれも危険な仕事だが、こういった人々の言うことは、いつも同じだった：必要とされている、ということは全く正当な言い分で、これ以上の言い分

はない。だが、このように向こう見ずな行動のために、ペストは貧乏人の間で最も猛威をふるった。ただでさえ困窮しているのに、病気になるで一層悲惨な状態になり、死体の山を築いたのである。⁶

Dekker の場合は、社会構造から転落した浮浪者や乞食たちが、Defoe のものでは、社会階級の底辺でかろうじて日々の糊口を凌いでいる貧困層が、ペストの餌食として記述されているという違いは存在したが、真っ先に避難行動を起こしたのが、富裕層であったという点では、見事な一致を示している。

最後に、このセクションを閉じる前に、演劇作品からも少しだけ資料を引いておく。Ben Jonson は、*The Alchemist* (1610) の“The Argument”の冒頭で、次のように述べている。

The sickness hot, a master quit, for fear,
His house in town, and left one servant there. (1-2)⁷

アクロスティックの詩形を使った梗概の最初の二行で、Jonson は 1609 年から 1610 年にかけて猖獗を極めたペストの様子を語っているが、やはりここでも裕福であろう主人だけが避難行動を起こしたことが、強調されている。

社会階級を構造化し、またそれを固定化し、流動化する第一のファクターが、経済的因子であるとするならば、自然災害にせよ、戦争などの人災にせよ、また今回のペストのようなパンデミックであれ、こうした二次的要因は、社会的勝者と弱者を分断するヒエラルキーをより一層明確化し可視化する訳であって、このような事象は、洋の東西を問わず、また時代の今昔を問わない、普遍的な事実であると考えられる。

2-a. 医療行為と難病に内在する階層化のヴェクトル ——治癒神と難病治療

ここまで我々は、感染症の大規模な流行が社会的弱者をより一層弱者化する、という現象を確認してきた。しかし、別の角度から考察すると、こうした疫病に立ち向かう医療や医学自体にも、人間社会を階級化し、権威や権力を発生させるメカニズムが内在していることに気付かされる。このセクションでは、この現象について考えてみたい。

医学や医療技術が未発達であった古代にあって、悪疫や難治性の疾患を治癒するという行為は、患者たちからの感謝や尊敬を集めるのみならず、そうしたある種の奇跡が医療者への崇拝へと繋がり、そこに一種の神格化が生じることは容易に理解されるところであろう。医学が高度に発達した現代においてさえ、超自然的な力の作用による病氣平癒を「売り」にした宗教団体あるいはそれに類する組織が、多くの信者を引き寄せ、彼等から多額の献納金を徴収するような事例は、我々もよく目にするとところである。

このように、医術と宗教の発生とは密接な関連を有するものであった訳だが、こうした治癒神の一例として、ここでは古代ギリシアや地中海沿岸の諸都市で崇拝されていたアスクレピオスに言及しておく。アスクレピオス神は歴史上の人物が神格化された事例ではないが、古代の人々の病氣治癒への想念が生み出した土着神的存在であり、再生のシンボルとしての蛇を常に伴う形で表象されていた。(なお、余談になるが、この蛇は現在世界保健機関 (WHO) のエンブレムともなっており、アスクレピオスがいかに医療というものを象徴しているかを物語っている。)

しかし、このアスクレピオス信仰は紀元前後から徐々に衰退し、三世紀から四世紀にかけて完全に消滅してゆく。その理由は、新たなそしてより強力な治癒神イエスが登場したからであった。多くの宗教がそうであるように、イエスの活動も当初は病を癒す奇跡を出現させることであり、こうした一連の行動を通して治癒神イエスが誕生し、原始キリスト教が成立してゆく。治癒神アスクレピオスと治癒神イエスとの競合そして前者の敗退は、新興宗教であったキリスト教が、土着の宗教に取って代わるプロセスでもあった訳である。

さて、このように何らかの疾患を治療する能力あるいは技術を有する者は、今手短かに概観したように、時に神格化されると同時に、より世俗的な一般的なコンテキストの場合には、権力者もしくは権威という属性を帯びる存在へと定位される。Shakespeare 劇から二例程拾ってみると、真っ先に思い起こされるのが、*Macbeth* (1606) の四幕三場で言及される懺悔王 Edward の存在である。イングランドの医師の台詞を通して描写される Edward は、通常の医術では治療不能な疾患を患う多くの惨めな民を、その触診によって瞬時に治癒してしまうという奇跡をなす国王であり、その治療対象とされる病氣とはいわゆる King's Evil つまり「瘰癧 (るいれき)」(この疾患を現代の病理学的に鑑別すれば、結核性頸部リンパ節炎に相当する) ということになる。もちろん、この Edward 王への言及は、神聖なる Edward を王に戴く健全なるイン格蘭

ドとのコントラストを通して、病めるスコットランドを前景化することが、第一義的機能であることは言うまでもない。しかし、奇跡的治癒力を行使することが可能であるという属性を Edward に付与することで、Edward が聖なる存在へと権威付けられ、ヒエラルキーの最上位にいる国王をさらに上位へと格上げするヴェクトルが、作動していることを忘れてはならない。そしてその際、この瘰癧という疾患は、特に大きな働きをされると考えられる。医療行為者が、治療行為を通じて一種神格化されるためには、一つにはその疾患が難治性であること、もう一つにはその疾患の治療前後での外観上の変化を通じて視覚的インパクトを与えうること——この二点が重要であると思われる。瘰癧は当時難治性と考えられていた上に、頸部に発現した複数のリンパ節の腫瘍・腫脹が、時に大変グロテスクな潰瘍を形成したことが知られている。難治性疾患と悪性の皮膚病変からの神秘的な治癒・回復が、治療実行者に権威を付与する機序が、ここには存在すると言えるであろう。

同様に、*All's Well That Ends Well* (1603-04) における Helena の医療行為も、同系統の例として明瞭なものと思われる。Helena は、死すべき自然界の生命を不死にするまでの医術の持ち主、と評価される程の高名な医師の娘ではあったが、実績の全くない彼女の治療の申し出を不治の疾患に苦しんでいたとはいえ、フランス王は当然ながら一顧だにしない。しかしその後、彼女は治療に成功し、その成功と引き替えの配偶者獲得を通して、結果的に彼女は伯爵夫人の座、あるいはそこに昇格するための国王の許可を入手する。この戯曲のケースでは、孤児であった Helena が貴婦人の地位とそれに付随する権威を獲得するという側面が見られると同時に、難病の治療成功と貴族の指名権との取引契約という交換経済的な側面も観察される点、またフランス王の病が“fistula”と呼ばれる消化器系の潰瘍であり、治癒した場合でも顕著な視覚面での変化をもたらさない点など、*Macbeth* の事例とはいくらか異なる面が存在するが、フランス国のヒエラルキーにおける Helena の上位への移動という現象は、確実に観察することができる。

2-b. 医療行為と難病に内在する階層化のヴェクトル ——難治性疾患と皮膚病変

前節において、奇跡的な難病治癒とそれを通しての権威獲得のメカニズムを、Shakespeare 劇から二例引きながら我々は見てきた。こうした事象は、

疾患と医療をめぐるの上位方向への階層化を発生させるもの——これを仮に人間社会のポジティブな分断化と呼ぶならば、もちろん、その対極にネガティブな分断化も存在する訳である。次に、この側面について検証してみよう。ただし、これに関する明瞭かつ適切な例を、Shakespeare 作品および初期近代演劇から採取することは困難なため、今回は話題を広く渉猟するという意味も込めて、別の事例を使って議論してみたい。

そこで最初に言及したいのは、インダス文明における身分的階級制度、つまりカースト制度と疫病との関係である。中央アジアで遊牧生活を営んでいたアリア人は、紀元前 2000 年から 1500 年にかけてインド北西部に侵入し、インダス文明を構築した先住民を駆逐しながらその文明を領有し、その地で定住農耕生活を開始する。やがて彼等は、紀元前 1000 年頃からインド北東部のガンジス川流域へも進出し、その文明の版図を拡大してゆくことになる。ところが、このガンジス川流域という土地は高温多湿な環境条件故に、コレラやマラリアなどによる極めて高濃度の感染症汚染地域でもあり、猖獗を極めた疫病が新住民を圧倒し、大きな打撃を与えたと言われている。

本論の冒頭でも確認したように、大規模な感染症からの被害を最小限に押さえる最も確実な方法の一つが、感染地帯からの避難や回避であり感染者の隔離であった。*Plagues and Peoples* (1976) を著した歴史学者の William McNeill や文化人類学者の川喜田二郎などは、カースト制度の起源にこうした公衆衛生的視点を持ち込んでいる。つまり「穢れ (けがれ)」という、コミュニティの構成員の言動を制御する観念やある種のイデオロギーを植え込むことを通して、構成員の交流を管理・制限しようとする方向性が、この階級制度の創設や強化に寄与したという考え方である。この仮説には、異論もあり、また疫学 (つまり医学的統計学) 的に見た時、必ずしも妥当ではない部分もあるのだが、隔離が疫病対策として有効である以上、社会共同体の階層化が疫病の回避を可能にすると考えることは、十分に自然なことにように思われる。そして、この時、最も感染のリスクがある社会的弱者すなわち最下層民は下位方向へと分断され、またいったん最下級へと定位された人々は、再度、再々度の疫病の来襲によって、最下層というその位置に一層固定化されてゆくことになる。

では、こうした下位方向への階層化の例を、もう少し具体的な文学作品——ここでは、松本清張の『砂の器』(1960-61)——から拾ってみたい。感染症に罹患したが故に、地域共同体から離脱せざるを得なくなった病人の例として、適切であると言ってよいであろう。

『砂の器』の主人公和賀英良は、父親が罹患したある感染症のために、故郷の石川県の寒村から日本海沿いに島根県出雲地方にまで、幼少の身で父親と共に遍歴の旅に出ることを余儀なくされる。物語は、主人公のこの過去を知る人物を主人公が東京蒲田で殺害するところから開始されるが、主人公親子を故郷から追い立てた病こそ、ライ病（ハンセン病）であった。ハンセン病が恐れられ、ハンセン病の罹患者が共同体から強制的あるいは自発的に追放されたのは、このセクションで何度も確認した、社会を分断化する二つの要件を、この疾患が備えていたからであった。すなわち、ハンセン病はかつては不治の病とされていたこと、そしてもう一つは、ハンセン病が、特に顔面を中心に結節性やびまん性の病変を生じさせ、患者はグロテスクな外観を有したためであった。ハンセン病自体の感染力はそれ程高くはなかったものの、家族間で感染するケースが多かったことや、致死率が高い病気ではなかったことで、いったん発症した患者は皮膚の奇形を長期間保有せざるを得ず、そうした条件がハンセン病を遺伝病と誤解させ、患者のみならずその世帯全体が差別を受けた訳である。中世ヨーロッパでは、郊外に多数の患者収容所が建てられ、13世紀には、その数が20,000近くにも達したと言われている。日本でも、各地に差別的隔離施設が作られ、入所者は生殖機能を剥奪されたことはよく知られているところである。

以上のように、難病あるいは不治の病と呼称される難治性の疾患に罹患すること、なおかつ悪性の皮膚病変を併発することで、患者は社会共同体の下位方向へ階層化・分断化されることを、我々は確認してきた。そこでここからは、再び、個別の具体的な病気のトピックに立ち戻り、その議論を通してShakespeare劇への足掛かりを探りたい。

先ず最初に、中世ヨーロッパで猛威をふるったとされる「三大疫病」——壊疽性麦角中毒・ハンセン病・ペスト——に関して検証しておこう。今第一に言及した壊疽性麦角中毒は、厳密には感染症ではない。微生物の一種である麦角菌が麦の穂に寄生することで、麦角という一〜三センチの菌糸の塊が生成されるが、この中に酒石酸エルゴタミンという有毒なアルカロイドが含まれ、この物質が含有する血管収縮作用のために、中世初期から盛期にかけて多くの民衆が中毒症状を呈し、特に顕著であったのが、手足など四肢の黒色色素沈着であり、さらに重篤なケースでは壊疽による手足の喪失が見られたと言われている。手足を失った多くの患者が、奇跡的治癒を求めて教会へと殺到したスペクタクルは、恐怖心と共に中世の記録に書き残されているが、ここで是非注目してお

きたいのが、皮膚の病変あるいは身体のデフォルメである。先に言及した、ハンセン病が引き起こす顔面を中心とした皮膚の奇形と、ペスト菌が惹起する敗血症による全身の出血性の紫斑——このためにペスト取り分け腺ペストは「黒死病」と呼ばれた訳だが——、そしてこの壊疽性麦角中毒による手足の壊死と喪失、この三者を並べてみれば、何故この三つの疾患が「三大疫病」と呼称されたのか、何故中世の民衆がこれらの病気を恐れたのかが、ある程度推察されるのではないであろうか。その要因の第一が、それらの疾患が発生させた圧倒的な患者数あるいは死者数であったことは当然としても、同時に、病気に罹患した結果病人の身体に烙印のように残される外観のグロテスクな変化も、大いに関与していると考えてよいであろう。

では次に、中世ヨーロッパから初期近代のイングランドへと、調査の対象を移した場合、感染症に関連するどのような指摘が可能であろうか。すでに本論の冒頭で、Dekkerのパンフレットを引きながら確認したように、ペストが相変わらずの最大の脅威であったことは言うまでもないとして、それ以外で顕著な事例としてやはり目にとまるのは、性病の梅毒と“pox”と呼ばれた天然痘ということになるであろう。梅毒と天然痘が、当時の感染症として突出していたのは、強力な感染力を持ち致死率も高かった——つまり不治の病で難病であった——ということに加えて、明瞭な皮膚病変を伴う疾患であったことが大きく与っていると思われる。梅毒の場合では、脱毛や、皮膚および粘膜に結節性病変や潰瘍（「耳や鼻がもげる」という表現はこれに該当する）が形成され、天然痘のケースでは、急性期の発疹と快復期の癍痕（いわゆる「痘痕（あばた）」）が、この疾患の重要な症状となっている。難治性でなおかつ皮膚の変形を伴うというこうした特徴は、当時の社会共同体において、これら感染症の罹患者にネガティブな評価を付与した訳だが、こうした現象は、Shakespeare劇や他の演劇作品に観察される、梅毒や天然痘への否定的な言及——最も典型的なケースとしては、例えば“A pox on him”といった表現で、敵対者への呪いや呪詛において使用されている——にも、明らかに反映されている。次節、最終セクションでは、この現象を *Timon of Athens* を中心に探ってみたい。

3-a. 社会的弱者としての病人——初期近代演劇からの検証

そこで、先ず最初に、初期近代演劇における疫病表象に言及した、次の記述から考えてみたい。

Despite this material threat to all those who worked in the theater and the many dramatic narratives that London's experience with plague made available — witness the stories of heroism, cowardice and greed recounted, for example, in Thomas Dekker's *The Wonderful Year* (1603) — no dramatist in the period chose to dramatize those directly affected by plague such as victims or survivors mourning the loss of family or friends.⁸

この一節は、Rebecca Totaro と Ernest Gilman が編集した論集 *Representing the Plague in Early Modern England* (2011) に収められた、Barbara Traister による論文 “A plague on both your houses’: Sites of Comfort and Terror in Early Modern Drama” の冒頭部からのものである。ペスト感染の拡大が演劇興行に打撃を与え、またペストがもたらす惨状を取り込んだパンフレットが発行されていたにもかかわらず、ペスト患者や遺族を舞台に上げた劇作家は一人もいなかったことを Traister は主張している。確かに、Shakespeare の *Romeo and Juliet* (1596) において、マンチュアにいる Romeo への手紙を託された Friar John を足止めにしてしまい、結果的に主人公二人の死を招いた張本人がペストであったり、Thomas Nashe が *Summer's Last Will and Testament* (1592) の中で、疫病に罹患し死に直面した君主の〈夏〉が、後継者もしくは相続人を決定する、そのプロセス自体をプロットに仕立てたり、さらには、Thomas Dekker の *The Honest Whore* 第1部 (1604) の冒頭で展開されるミラノ公爵の娘の葬儀や埋葬の描写が、ペストによる死者のそれに類似しているとの指摘がなされているなど、その程度のペスト関連の表象は、初期近代の戯曲にもあるにはあるが、それでも先に引いた Traister の見解は、おおむね正しいように思われる。

しかし、もしそうであるならば、社会的弱者としての病人を初期近代演劇の中に探る本論の試みは、ここに頓挫することになる。だが、疫病やその患者の演劇的表象がないのならばないで、その理由を考えてみる価値は存在するであろう。

社会的弱者が何らかの感染症に罹患し、一定期間の経過を経て死に至るといふ展開が、当時の舞台に存在しなかったとするならば、その最も単純で明瞭な理由として、その種のプロットが観客のメンタリティに対して訴求力を持たな

かったという回答が、有力な候補として考えられる。例えば、実際の殺人事件に取材し、比較的身分の低い人物が斧によって頭部を半分失った状態で登場する、Robert Yarington 作とされる *Two Lamentable Tragedies* (1594) のような、明らかに瞬間的でセンセーショナルでショッキングな効果を狙った劇とは違って、あるいは高位貴顕の人物たちが、様々な形で大量死を迎える *Hamlet* (1600) のカタルシスを伴うエンディングとも違って、⁹ 何らかの病気に感染して死亡するというストーリーでは、いかにその疾患が劇症型・急性型のものであったとしても、またいかに大量の死者が発生するものであったとしても、そのストーリーのみで戯曲の「持続的な」アクションを維持し、何らかの心理的効果を観客に付与することは、かなり困難な作業であったであろうし、しかもその人物が社会階級の下層に属するようなケースでは、なおさらの困難が推測される。

3-b. 社会的弱者としての病人——*Timon of Athens* への一つの視座

仮にこれからの分析対象を、初期近代演劇全般を離れて Shakespeare 劇にのみ限定し、「社会的弱者としての病人」という観点をいったんは棚上げした上で、そこに、(病人→死者、へのパターンに対応するような)最終的に死に至るような展開を有し、なおかつ下層階級への移動が絡む戯曲を求めるとすれば、もちろんその主要なターゲットは悲劇作品となる。しかし Shakespeare 悲劇において、階級面で明らかに下位方向へと転落し、その上で一定の時間アクションを維持できる人物はそれ程多くはなく、Richard II のようなケースでも、王位を剥奪され暗殺されるのはドラマの終幕近くであり、まして最終的に社会的弱者となったと呼べるかとなると、かなり難しいと言わざるを得ない。そうした中であって、ドラマの中盤あるいはかなり早い段階で、開幕時の階級から失墜し、社会的弱者の要因でもあり特徴でもある貧困にさいなまれる主人公を求めるとなると、二名のみ該当する。その二名とは Lear と Timon なのだが、この二人が主人公を務める二つの戯曲には、今述べたような共通項以外にも、推定創作年代が近接していたり、さらには失墜後の Lear と Timon が圧倒的な呪詛・悪態・毒舌を吐き散らすなど、多くの共通点を確認することが可能である。

ところが、その呪いの内容に注目すると、一見共通するかに見えた Lear と Timon にも、興味ある違いが存在することが判明する。荒野をさまよう Lear

が娘たちに投げ付ける呪詛とは、下記引用のように、

Now, all the plagues that in the pendulous air
Hang fated o'er men's faults light on thy daughters! (3. 4. 59-60)¹⁰

「疫病に取り付かれてしまえ」という感染願望を述べたものも一部には存在するが、圧倒的大多數は、次の引用が代表するように、「破壊」願望を中心にしたものである。

Blow winds and crack your cheeks! Rage, blow,
You cataracts and hurricanes, spout
Till you have drenched our steeples, drown the cocks!
You sulphurous and thought-executing fires,
Vaunt-couriers of oak-cleaving thunderbolts,
Sing my white head! And thou, all-shaking thunder,
Strike flat the thick rotundity o'th'world!
Crack nature's moulds, all germens spill at once
That makes ingrateful man! (3. 2. 1-9)

「大地の丸い腹をぶつつぶせ」、「自然の鑄型を打ち壊せ」、「万物の種を打ち砕け」といった具合に、娘たちの忘恩の仕打ちをきっかけに、世界の破滅・万物の根絶を願うまでに飛翔する Lear の呪詛には、ある種のスケールの大きさを感じさせる要素が内在していると言えるであろう。

では、その一方で、Timon の呪いはどうかと言うと、敵対者に対する感染願望があからさまな程に強調されていることが判明する。Timon が、恩知らずの貴族たちをにせの饗宴に招待し、石入りのぬるま湯のスープで愚弄する箇所と、その直後、アテネを捨て去りその城壁の外からアテネの人々に呪詛を投げ掛ける場面から、引用してみよう。

Of man and beast the infinite malady
Crust you quite o'er! (3. 7. 97-98)¹¹

ヒトや獣に感染する最悪の疫病に取り付かれ、全身できものやかさぶただらけ

になるよう呪うのが、この台詞のメッセージだが、難治性の疾患と皮膚病変がここにも顕現していることに注目したい。

Plagues incident to men,
Your potent and infectious fevers heap
On Athens, ripe for stroke. Thou cold sciatica,
Cripple our senators that their limbs may halt
As lamely as their manners;

.....

Itches, blains,
Sow all th'Athenian bosoms, and their crop
Be general leprosy; breath, infect breath,
That their society, as their friendship, may
Be merely poison. (4. 1. 21-25, 28-32)

「人間につきものの疫病よ、 / お前の強力な伝染性の熱をアテネの中空に蓄え、 / いつでも降りかからせる用意をしてくれ！梅毒よ、 / 元老どもに取り付いて足腰を立たぬようにし、その礼儀同様 / かたわにしてやってくれ！ / / 疥癬とできものよ、 / 全アテネ人の胸に種をまきつけ、ライ病の実を / 豊かに実らせてやってくれ！ものを言えば / 口から口へと病が伝染し、人と人とのつきあいは / 友情と同じく、毒のうつし合いになってしまえ！」¹²ここでTimonが強いこだわりを見せている病気の共通項を挙げておくと、感染症であること、皮膚病変を伴うこと、そして致死率が高いこととなる。特に、梅毒に代表される性病は、この後の展開で、地中より掘り起こした金貨をTimonが売春婦になぞらえること、さらにはTimonを尋ねてきたAlcibiadesが二人の売春婦（もしくは愛人）を連れていたことから、Timonの呪いの中で重要なメタファとして流通してゆくが、その際にも、皮膚の奇形、鼻の欠損など顔面の変形、また身体の不具などが、前面に押し出されていることに、改めて注意を喚起しておきたい。

Timon of Athens という作品は、Marxがその*Das Kapital* 第1巻(1867)の中で、先に言及した金貨の場面に触れているように、近年の批評においては、「交換」をキーワードに、貨幣経済の中で物神崇拜に囚われ自己の所有財産がすなわちおのれの価値である、という等号関係を信じ込んだ男の悲劇、といっ

た図式で解釈されることが多かった戯曲であるが、では、その主人公 Timon の経済的没落と、疫病への執着との間には、どのような連関が存在するのだろうか。

本論の最初のセクションでも言及したように、「社会階級を構造化し、またそれを固定化し流動化する第一のファクターが、経済的因子であるとするならば」、その定義の限りにおいて、Timon は、おのれの散財の結果、社会的弱者へと転落したと考えてよいように思われる。もし、その Timon が、何らかの感染症に罹患し、貧困故に十分な医療行為も受けられずに死亡した、といった展開が存在するならば、本論にとって大変具合のよいことになるが、もちろんそう都合よくは行かない。しかし、この作品を暫定的に悲劇だと見なし、その第一の根拠が主人公 Timon の死であるとするならば、そこに極めて興味深い問題点が存在するように考えられる——すなわち、Timon は何故死んだのか、Timon の死因は何か、という問題である。

Timon of Athens という戯曲は、従来より、その構造上の破綻や不完全さが指摘されてきた作品だが、取りあえず現行のテキストに依拠する限り、Timon の死因を特定することは不可能である。助力を求めてきた元老院議員たちを相手に、人間存在そのものに対する呪詛と自らの死と墓への言及を行ってから、わずか 20 行ばかり後で Timon の墓と墓碑銘が発見されるからである。Timon はどのようにして死んだのか——他殺説や病死説は、それを支えるエヴィデンスがテキストには存在しないため、もっとも妥当な見解としては、特殊な方法を使用した自殺ということになるのかも知れない。しかし、Timon が見せた疫病へのこだわりという観点から、改めてテキストを検証してみると、Timon が比喩的な次元で「病人」であった可能性が浮上してくる。

Must I be his last refuge? His friends, like physicians,
Thrive, give him over --- must I take th' cure upon me? (3. 3. 12-13)

おのれの財政の危機的状況をようやく認識した Timon は、頼みの綱としてすがった貴族たちに次々と拒絶されてゆく。上記引用の箇所は、その一人 Sempronius の台詞で、財政破綻を起こした Timon を病人に喩え、瀕死の患者につけ込んでいかがわしい治療を施し、治療費を巻き上げた挙げ句に患者を見捨てる悪辣な医者に、Timon の世話になった他の貴族たちをぬけぬけとなぞらえている。

ところで、こうした不埒なニセ医者や薬屋の類は、ロンドンがペストに襲われる度にしたたかに活動していて、その実態は、先に言及した Dekker や Defoe のルポルタージュにも克明にまた生々しく記述されている。このような日常的衛生環境の中で生活を営んでいた観客に対して、この戯曲は、破産者 Timon をペスト罹患者と二重写しの形で呈示し、そしてその Timon はその後の展開において、「狂人」と同定され、その挙げ句に Timon は感染症まみれの呪いをまき散らすことになるのである。

この種の経済的危機にある人物（あるいは、場合によっては都市や国家）を、「病人」の比喻で語ることはそれ程珍しい現象ではないが、Timon の場合特異なのは、その呪いに込められた感染願望の激越さであり、執拗さだと言える。次の引用は、本劇の大団円で読み上げられる Timon の墓碑銘の一部だが、

Here lies a wretched corpse, of wretched soul bereft;

Seek not my name; a plague consume you, wicked caitiffs left.

(5. 4. 70-71)¹³

最後の最後に至るまで、疫病の呪詛を劇世界に反響させることを通して、Timon という人物からは、感染症の発動に与る、何らかの力の具現者でさえあるかのような、印象を我々は受ける、ということも可能であろう。そして、このことは病理学的なコンテキストで考えれば、Timon は感染症の拡散を仲介する感染源（キャリアー）であり、感染症の罹患者ということにもなり、そしてその意味づけは、「病人」としての Timon のメタファを補強するもののようにも考えられる。

財政破綻という経済的要因によって、社会的弱者へと Timon が失墜したとするならば、その上にさらに「病人」というニュアンスを背負うことによって、Timon は一層「弱者化」され、アテネ社会の勝者と弱者を分断するヒエラルキーは、より一層明確化され可視化される——そのような方向性で、*Timon of Athens* という作品の一面を理解することも、可能なのではないであろうか。本論は、「社会的弱者としての病人」という主題をめぐる様々な言説について考察し、*Timon of Athens* という戯曲を分析するための一つの視座として、疫学的アプローチの提案を行った。

注

- *本論は、平成 23～25 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 (C)）「エリザベス朝演劇文化の誕生に作用した大学才人と英国国教会の接触に関する動態的研究」（課題番号 23520282）の成果の一部である。
- 1 G. B. Harrison, ed., *Thomas Dekker: The Wonderful Yere 1603* (Edinburgh: Edinburgh UP, 1966) 46-47.
 - 2 トマス・デカー、『しゃれ者いろは帳他』, 北川悌二訳（北星堂書店, 1969 年）134-35 頁。
 - 3 Louis Landa, ed., *A Journal of the Plague Year: Being Observations or Memorials of the Most Remarkable Occurrences, as well Publick as Private, Which Happened in London during the Last Great Visitation in 1665* (London: Oxford UP, 1969) 18.
 - 4 ダニエル・デフォー、『ロンドン・ペストの恐怖』, 栗本慎一郎訳（小学館, 1994 年）28 頁。
 - 5 Defoe, *A Journal of the Plague Year*, 209-10.
 - 6 デフォー、『ロンドン・ペストの恐怖』203-4 頁。
 - 7 *The Alchemist* からの引用は, Ben Jonson, *The Alchemist, The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 3, eds. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson (Cambridge: Cambridge UP, 2012) に拠る。
 - 8 Barbara Traister, “A plague on both your houses’: Sites of Comfort and Terror in Early Modern Drama,” *Representing the Plague in Early Modern England*, eds. Rebecca Totaro and Ernest B. Gilman (New York: Routledge, 2011) 169.
 - 9 *Two Lamentable Tragedies, Hamlet*, どちらのケースにおいても, 感染症の事例には該当しないが, 前者の戯曲は「瀕死」の外傷を負った人物が登場する例として, 後者の戯曲では「大量死」という点に注目して, 言及している。
 - 10 *The Tragedy of King Lear* からの引用は, Jonathan Bate and Eric Rasmussen, eds., *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works* (Basingstoke: Macmillan, 2007) に拠る。
 - 11 *Timon of Athens* からの引用は, 最終引用を除き, Anthony B. Dawson and Gretchen E. Minton, eds., *Timon of Athens* (The Arden Shakespeare—Third Series) (London: Cengage Learning, 2008) に拠る。
 - 12 ウィリアム・シェイクスピア、『アテネのタイモン』, 小田島雄志訳（白水社, 1983 年）103-4 頁。ただし, 一部原文を変更した。
 - 13 Karl Klein, ed., *Timon of Athens* (The New Cambridge Shakespeare) (Cambridge: Cambridge UP, 2001). Timon の墓碑銘は, 版により二通りの読みが存在する。

Here lies a wretched corse, of wretched soul bereft;
 Seek not my name; a plague consume you, wicked caitiffs left.
 Here lie I, Timon, who alive all living men did hate;
 Pass by and curse thy fill, but pass and stay not here thy gait.

The Third Arden Shakespeare は後半の二行のみを採用しているが、The Riverside Shakespeare (1997), The New Cambridge Shakespeare, The Oxford Shakespeare (2004), The RSC Shakespeare の各版は上記四行すべてを墓碑銘として扱っている。この問題に関しては、以前から議論のあるところであるが、本論では感染症表象の観点から四行説に与している。議論の要点に関しては、The Third Arden と The New Cambridge 版の解説を参照。

参考文献

- Bate, Jonathan and Eric Rasmussen, eds. *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Basingstoke: Macmillan, 2007. Print.
- Defoe, Daniel. *A Journal of the Plague Year: Being Observations or Memorials of the Most Remarkable Occurrences, as well Publick as Private, Which Happened in London during the Last Great Visitation in 1665*. Ed. Louis Landa. London: Oxford UP, 1969. Print.
- Dekker, Thomas. *Thomas Dekker: The Wonderfull Yeare 1603*. Ed. G. B. Harrison. Edinburgh: Edinburgh UP, 1966. Print.
- Jonson, Ben. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. Vol. 3. Eds. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson. Cambridge: Cambridge UP, 2012. Print.
- Lodge, Thomas. *The Complete Works of Thomas Lodge*. Vol. 4. New York: Russell and Russell, 1963. Print.
- Shakespeare, William. *All's Well That Ends Well*. Ed. G. K. Hunter. London: Methuen, 1959. Print.
- . *Macbeth*. Ed. Nicholas Brooke. Oxford: Oxford UP, 1990. Print.
- . *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. London: Methuen, 1951. Print.
- . *Timon of Athens*. Eds. Anthony B. Dawson and Gretchen E. Minton. London: Cengage Learning, 2008. Print.
- . *Timon of Athens*. Ed. Karl Klein. Cambridge: Cambridge UP, 2001. Print.
- Barroll, Leeds. *Politics, Plague, and Shakespeare's Theater: The Stuart Years*. Ithaca: Cornell UP, 1991. Print.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen, 1985. Print.
- Bentley, Greg W. *Shakespeare and the New Disease: The Dramatic Function of Syphilis in Troilus and Cressida, Measure for Measure, and Timon of Athens*. New York: P. Lang, 1989. Print.
- Crawford, Raymond. *The King's Evil*. 1911. New York: AMS, 1977. Print.
- Diamond, Jared. *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*. New

- York: W. W. Norton, 1997. Print.
- Elam, Keir. “‘I’ll Plague Thee for That Word’: Language, Performance, and Communicable Disease.” *Shakespeare Survey* 50 (1997): 19-27. Print.
- Fabricius, Johannes. *Syphilis in Shakespeare’s England*. London: Jessica Kingsley, 1994. Print.
- McNeill, William H. *Plagues and Peoples*. Garden City, NY: Anchor, 1976. Print.
- Porter, Joseph A. *Shakespeare’s Mercutio: His History and Drama*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1988. Print.
- Salgãdo, Gãmini. *The Elizabethan Underworld*. London: J. M. Dent, 1977. Print.
- Totaro, Rebecca, ed. *The Plague in Print: Essential Elizabethan Sources, 1558-1603*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2010. Print.
- and Ernest B. Gilman, eds. *Representing the Plague in Early Modern England*. New York: Routledge, 2011. Print.
- . *Suffering in Paradise: The Bubonic Plague in English Literature from More to Milton*. Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 2005. Print.
- 池上俊一. 『歴史としての身体—ヨーロッパ中世の深層を読む—』. 東京: 柏書房, 1992.
- 原田範行. 「魔女の大釜, レヴェットの洞窟—文学的表象にみる近代英国ヤブ医者群像』. 小菅隼人編『身体医文化論Ⅲ 腐敗と再生』. 東京: 慶應義塾大学出版会, 2004. 182-205頁.
- 村上陽一郎. 『ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊—』. 東京: 岩波書店, 1983.
- 山形孝夫. 『治癒神イエスの誕生』. 東京: 筑摩書房, 2010.
- 山本太郎. 『感染症と文明—共生への道』. 東京: 岩波書店, 2011.